

長岡第七小学校のすぐ東隣りに、長岡京時代の貴族の屋敷跡があったのをご存知ですか。

長岡京は、奈良の平城京や京都の平安京と同じく、道路で碁盤の目のように区画されていました。一つの区画は約120メートル四方で、これを一町といいます。位の高い人は一町そのままを住居にし、位が低くなるにつれ、それを細かく分割して住居していました。

長岡第七小学校の隣りは、長岡京の地名表示で右京四条二坊八町といえます。この八町で、東西方向に向いた規模の大きな建物が2棟、その西側に南北方向の少し規模の小さな建物が4棟見つかりました。東西方向の建物はおそらく中心的な建物でしょう。周りの建物は付属の施設と見られ、東側にも同じように小さな建物が並んでいたと考えられます。

これらの建物の様子から、一町のうちの東半分を住居にしていたようです。ただし、当時この土



▲ 南から見た建物跡

地の北東の角には川が流れていたため、実際の面積はもう少し狭かったようです。

このように一町の半分をもらえるのは、少し位の低い貴族でした。残念ながら住人の名前は分かりませんが、位が低いといつてもそこは貴族。宅地の中には、都では珍しい倉庫がありますし、一般的な土器のほかに緑色の釉薬をかけた高級な焼き物も出土しています。また、墨できれいな花びらを描いた土器も出土していて、貴族の生活の一端を知ることが出来ます。

西側のもう半分の土地からも建物が1棟見つかっています。詳しいことは分かっています。この土地の一部は、長岡第七小学校にもかかっています。ぜひ授業の合間にも、長岡京の昔に思いを馳せてみてください。

(財)長岡京市埋蔵文化財センター



▲ 貴族の屋敷 (長七小の東隣り)